

文学〈四〉

文学史

〜川端康成〜

今回の学習のポイント

「川端康成」について知ろう！

国語監修・執筆

中澤 匠吾

川端康成（かわばた・やすなり）明治三十二年（1899）〜昭和四十七年（1972）。大阪出身。小説家。大学在学中、文芸雑誌「第六次」新思潮」に発表した作品を菊池寛に認められ、文壇への道が開ける。作品は、美しく詩的で繊細な情景や心情の描写などが特徴的で、その文体は美しい日本語表現のお手本としてもしばしば取り上げられる。日本人初のノーベル文学賞を受賞したことも知られている。

代表作 『伊豆の踊子』『雪国』『山の音』『眠れる美女』『古都』など

## 生い立ち

大阪で生まれた川端康成は、幼いころに両親を病気で亡くし、祖父母に引き取られ、姉とも離れ離れになりました。その後、中学（現在の高等学校）三年までの間に祖父母、姉を失い、若くして孤独な境遇に身を置くことになってしまいます。母の実家に引き取られ、世話になりながら、やがて第一高等学校から東京帝国大学へと進みました。こうした幼年期から青年期にかけての経験は、川端の人格形成やその後生み出される作品の主題などに少なからず影響を及ぼしたといえるでしょう。

## 伊豆への一人旅

第一高等学校に進み寮生活をしていた川端康成は、十九歳のときに一人で旅に出ます。

湯ヶ島から天城峠を越え、湯ヶ野、下田までの旅でした。そこで、旅芸人一座と道連れになった川端は、その一行の人々や踊子との関わりの中で、孤独に閉ざしていた心が解きほぐされていったということです。この体験をモチーフにして執筆された小説が、『伊豆の踊子』です。番組では、当時川端が宿をとり、小説の舞台の一つにもなった湯ヶ野の温泉宿が登場します。

## 『伊豆の踊子』 (大正十五年)

前述の通り、川端康成自身の体験が投影された作品です。伊豆への旅の途中、下田に向かう旅芸人一座との交流によって、孤独意識が強く、歪んだ思いを抱えていた「私」に心境の変化が生まれます。踊り子に対して芽生えた「私」の淡い恋心、道中をともにした一行との別れといった旅情が描かれています。

## 『雪国』 (昭和十年～昭和二十二年)

『雪国』は、『伊豆の踊子』と並び、川端康成の代表作と言える長編小説です(短編を断続的に積み重ねる形で発表)。東京に住む島村という男が、雪国の温泉町を訪れて女性と知り合い交流することをベースに、登場する人物たちの微妙な心理の揺れ動き、男に思いを寄せる女性の純情や人生の悲哀などが描かれています。

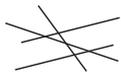
作品の主題などをとらえるには難解なところもあるかもしれませんが、「風景、情景の描写、表現」という点においても注目される作品です。特に「国境の…」で始まる書き出しから冒頭の部分は有名で、作品を通して読んだことがなくても書き出しの一文はどこかで聞いたことがあるという人もいるかもしれません。短文を連ねることで生まれるリズム、視覚的な情景とともに伝わってくる空気感などがとても印象的に描かれており、日本語の美しさ、奥深さを感じることができ、ぜひ一読してみてもほしい文章です。

ちなみに、この作品の舞台のモデルとなっている「雪国」とは新潟県の越後湯沢、「国境のトンネル」は群馬県と新潟県を結ぶ清水トンネルです。『伊豆の踊子』同様、川端が実際に旅をしたこと、そこでの人々との出会いをもとに生まれた作品です。

## ノーベル文学賞受賞と自死

昭和四十三年(1968)、川端康成は日本人として初のノーベル文学賞を受賞しました。受賞理由は、「すぐれた感受性をもって日本人の心の神髄を表現し、世界中の人々に深い感銘を与えた」というものでした。日本の美的感性と表現が高く評価されたのです。

功績が認められ世界的な名声を得た川端でしたが、この受賞から四年後の昭和四十七年(1972)七十二歳のとき自ら命を絶ってしまいます。ノーベル賞受賞後の重責、心労、親交の深かった三島由紀夫の自死(川端死去の二年前)の衝撃などいくつかの原因が考えられるものの、いずれも定かではなく(事故死とする見解もある)、その本当の理由は今も謎に包まれています。



## まとめ

日本の美意識を追求し、世界的な評価も受けた川端康成は、数々の名作を残しました。番組でも触れていますが、代表作の一つである「伊豆の踊子」は短編小説で、あまり構えすぎずに読み通すことができると思います。また、作家ゆかりの地を訪ね、思いをはせることで、作者の存在や作品の世界がいつそう身近なものに感じられます。

作家、そして作品に興味を抱いたら、ぜひ手に取って読んでみてはいかがでしょうか。